



馬耳東風

「元気で働いていますが、何せ歳だから少しずつにしています。80歳の春に石垣を組み、81歳で櫓を立ち上げ、82歳で倉と塀と門を建て、83歳で物置と池を造り、84歳でコロナ防止の茶屋を手がけて楽しんでいます。」とのお手紙を頂いた。若い頃は東京で学び、福島の田舎へ帰った教え子からのものだ。確か大先輩の学生がいたのを思い出す。福島の山里に帰り地域に密着して、専門の建築事業に携わりながら実直で謙虚な性格から推されて地域の議員を務め、後進に道を譲り立派な顕彰を受けたと伝え聞いた。あの大地震と降って湧いた放射能汚染では先頭立って思いっきり活躍しただろう。過密の東京で学び、過疎の田舎暮らしはこの時期大いに歓迎されるころだ。まさに悠々自適のうらやむ生き様とみた。

人生百年時代の到来だ。ペットのZoonosisで活躍された小動物臨床獣医師のA博士は、日本医師会との交流で先鞭をつけられ、いわば“One Health”の先駆けとなった。北里大と東大で学び感染症に詳しい。埼玉と沖縄の二カ所で診療し、飛行機で飛び回る生活を続けていた。機中は貴重な読書時間だといつも本を手放さない。何冊も啓発書を書きメディアでの登場も多い。曰く「人生二毛作時代です。二期作ではありません。残りの半分は遣り残した別のことをします。」という。まさに農学系出身者の知の言葉だ。都立高校を卒業の折、果たせなかったもう一つの夢を極めたいと臨床獣医師をリタイアし、何と武蔵野音楽大学の門を叩いた。声楽科の公

開考査に思いがけず立ち合わせて頂いた。音響効果の素晴らしい教室でピアノの伴奏にあわせ、タキシード蝶ネクタイで正装し原語で歌う喉の奥から響く発声は、江古田の会場を震わせ審査員の真剣な眼差しを受けていた。歌い終えた表情は青春の夢を追いかける屈託のない明るいものだった。熟年の歌声響く幕開けが待たれる。

日本農業にとって農地の耕作放棄が大きな課題だ。細切れの錯圃農地が多く効率が悪いと農政改革を夢見た民俗学の柳田國男が指摘している。今や機械化に依りやすく生産効率を向上させたいと農地の集積化が農政の柱である。武蔵野台地の一角に広大な“味の狭山茶”の茶園が広がる。所有者は地域の農民たちが祖先から引き継いだ畜産が有機的に結合する美しい景観を誇る自作農地だ。自園自製の六次化園か、共同工場に参入の自立化園か、栽培園地の集積化で多元化飲料業界に攻め込むかの工夫を迫られている。共同工場はASIAGAP認証をすでに取得した。強い農業を目指す農地を集積しながら拡大成長する法人組織が展開している。その集積面積が60ヘクタール？に膨れ上がった。7割が飲料メーカーに飲み込まれる。地元生産リーダーが25名の従業員をまとめ大型機械力を駆使して担当している。昔の農作業の面影はない。この現実に地元労働力の圏外転出の寂しさはあるが、耕作放棄を免れている都市近郊主産地の現実がある。輸出製品には世界遺産の細川和紙に美人画和風の茶壺が添えてある。外へ向かって打って出るブランドに期待したい。人生フロンティア3題を追ってみた。

(柏)